



MDP

Sagantosu

MATCHDAY PROGRAM

9.28

 (土)

 19:00 KICK OFF
 vs アビスパ福岡


©1995 FUKUOKA BLUE CO.,LTD.

監督

木谷 公亮

Kosuke KITANI

進

「私自身が迷うことはありませんでした」。そこにためらいも逡巡も一切なかった。根底にあったのはサガン鳥栖というクラブへの強い思い。選手としてJ1昇格を経験し、そのエンブレムを背負って自身初のJ1の舞台でのプレーも経験した。引退後にはコーチという立場でも責任を与えてもらった。そんな特別なクラブがJ1降格の危機に喘いでいる中で打診された監督就任に木谷公亮が迷うはずもなかった。

“木谷監督”が目指したのは原点回帰だった。「あきらめないところや走るところ。鳥栖は大きなクラブではなく、そういうクラブがビッグクラブに立ち向かっていくためにはまずは体を動かす。見ている人に何かを感じてもらえるようなチームにしていきたい」。自身が選手、コーチとして意識し、体現してきた鳥栖の伝統。「守備の原則をもう少し、落とし込んだほうがいい」と鳥栖が長きに渡ってスタイルとしてきた堅守速攻への回帰を期した。

そして、もう一つ、木谷監督が大事にしたのがサポーターの存在だった。「鳥栖にとってサポーターの存在というのはとても、とても大きいもの。その方々を巻き込んで、一緒になって、残留というミッションを達成していきたい」。自らクラブに働きかけてサポーターへの練習公開の機会を増やし、ときには練習後に自らサポーターの前に立ち、熱い言葉でサポーターへ共闘を呼び掛けた。困難なミッションを果たすために必要不可欠な団結力。選手、スタッフだけでなくサポーターも巻き込んでいくことでクラブ名の由来である“砂岩”としてのまとまりを作り上げようとしている。

就任以来、未だ結果は出ていないが、あきらめる気持ちは一切ない。就任時、自らが訴えかけておきながらそんな素振りを見せるわけにはいかない。今節は福岡との九州ダービー。「僕も当然、理解しています」と指揮官はサポーターの思いを背負って戦う重みを十二分に分かっている。木谷監督がこのビッグマッチを制したとき、残留へのこれ以上ない力を手にできるはずだ。

指揮官は絶対にあきらめない。サポーターとの
 “共闘”で木谷監督はダービーでの勝利を
 目指す